



センダンの木は 新川和江先生そのもの センダンの木の集い 代表 関和代さん

センダンの木の集いは、「詩を書く人も、書かない人も、詩をととして『どのように生きるか』と一緒に語り合おう」という新川先生の想いのもと、平成16年に創設されました。先生の母校である絹川小学校に、思い出深い「梅檀の木」があったことが名前の由来で、学校の玄関には今も、初代・梅檀の切り株と、「センダンの木の下で」と題した先生直筆の詩が飾られています。集いは、毎月第1日曜日に市民情報センターで開いています。先生は高齢で参加が難しいのですが、参加者同士で先生の詩を朗読したり、創作詩を持ち寄って発表したりしています。詩の出来を評価するわけではなく、一人ひとりの心にある「新川和江」を大切に、先生の詩にふれる時間を“共有”している感覚ですね。



絹川小の玄関にある「センダンの木」切り株

先生はよく『豆を煮たら日本一』という言葉を使います。“豆を煮る”という日常の何気ない作業も、“日本一”だと自慢できるほど何度も何度も繰り返すことで、感覚が研ぎ澄まされ、新たな気づきが生まれる。『言葉は日常生活の中からし

か生まれない』という、先生の信念を正に表している言葉だと思います。

先生の心には常に「ふるさと結城」への想いがあります。ゆき図書館のギャラリー「新川和江コレクション」には、先生から寄贈された蔵書が約1万冊収めら



沢山のふせんが貼られた詩集

れていますが、寄贈の際に『私の魂が結城に里帰りした』と言っていました。それだけ、先生が歩んできた証である本や詩集を、結城に残せることが嬉しかったのではないかと思います。

先生の心がいつでも「里帰り」できる場所として、これからもこの集いを続けていきたいと思います。詩に限らず、俳句・川柳・小説など、創作活動に興味のある方はぜひ気軽に参加してください。



新川さんとセンダンの木の集いの皆さん (平成30年2月撮影)

問 センダンの木の集い
代表 関
☎ 080-3006-2539

実は「結城市民の歌」も新川さんが作詞されました♪

結城市民の歌は、1984(昭和59)年に市制施行30周年を記念して制定されました。

1 番 楽 譜 ※途中まで

作詞：新川 和江
作曲：岩河 三郎



1 番 歌 詞

おはよう結城 わたしたちの市
むらさきの筑波のみねから 太陽ののぼる市です
鬼怒川の流れのほとり 千年の昔も今も
娘らがはた織る音の 高らかにひびく市です
名にし負う 名にし負う つむぎのふるさと結城
※歌は3番まであります。詳しくは市ホームページへ。

防災行政無線から
「正午の時報」
として流れる曲が
結城市民の歌です！



第14回 新川和江賞 ～未来をひらく詩のコンクール～

2月13日、市民情報センターで「第14回新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」の表彰式を行いました。詩の創作活動をととして、創造性豊かな青少年を育成し、新たな才能を発掘したいという新川さんの思いは受け継がれ、今年も市内在住・在学の小・中・高校生から、1,989 篇という多くの応募がありました。

新川和江賞（最優秀賞）に、登坂悠生さん（結城西小学校6年）の作品「おばあちゃんの庭」が輝き、優秀賞に12人、優良賞に31人の作品が選ばれました。

表彰式は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止を考慮し、例年より規模を縮小して行いました。



新川和江賞（最優秀賞）
「おばあちゃんの庭」

結城西小学校6年
登坂悠生さん



だれもないおばあちゃんの家
庭にはたくさんのお木や草花
おばあちゃんが大切に育ててくれたものだ
雑草が生え 木の枝がのびてしまったので
お父さんとお母さんが手入れをする
ばくも草むしりのお手伝い
すると 足元にありの行列
石のかげからあわてて走り出すカナヘビ
草むらからピョンとどび出して来たバツタ
花だんのすみにはアサガオの芽
一年生の時 おばあちゃんにあげた種から
毎年花をさかせているアサガオだ
たくさんのお木や植物たち
たくさんのお木や植物たち
だれもないおばあちゃんの家
でもその庭で
生き物たちは命をつないでいる
少しきれいになった庭を見て
おばあちゃんが
優しく笑ってくれたように感じた

講 評

選考委員長
詩人 武子 和幸さん

1 行目を読んだとき、そこにはふかい悲しみが感じられて、おばあちゃんは亡くなったのだなと思いました。しかし、その悲しみをうめるように、草が生え、ありがた行列をくみ、カナヘビがすばやく走り、バツタがピョンとどびだし、なつかしいアサガオが芽をだしている。おばあちゃんを思い出して涙がでそうですね。おばあちゃんのない悲しい場所には、たくさんのお木や植物が元気いっぱい生きていて、生命に満ちあふれている。おばあちゃんのお顔のように。

そのとき悠生さんは、何を感じたのでしょうか。だれか亡くなっても、たくさんのお木や植物がその生まれかわりのように命をつないでいる。それだけで終わりではないのだよと、おばあちゃんが教えてくれたように感じたのかもかもしれませんね。とても心にひびきました。

以前、新川さんに「結城の子どもたちの詩の素晴らしいところはどこですか?」とお聞きしたところ、「豊かな自然と人々との濃密な関係の中に暮らしているの、理屈から入るのではなく、心に映った風景を素直に表すナイーブさが感じられ、とても心を打つ」と答えられました。この言葉は、新川さんが詩を書くとき一番大切にしていることだと思います。詩に説明は必要ありません。映った姿、感覚が捉えたイメージそのものが、詩だということでしょう。

新川さんは、「言葉への感受性」のきわめて鋭い詩人です。結城は、与謝蕪村が「北寿老仙をいたむ」という、きわめて近代的な感性に満ちた詩と言うべきものを書いたまち。その豊かな文化と自然の中で感受性が育まれ、さらにたくさんのお外国や日本の詩をよんで、言葉への強い関心と言語感覚を磨き上げていったのだと思います。



プロフィール

昭和13年東京都生まれ。日立市で育ち、茨城大学卒業。詩誌「白亜紀」同人。著書に「蛸娘(なめくじ)の夢」「イエツの影の下で」「モイライの眼差し」など。(一社)日本詩人クラブ元会長。茨城新聞「詩壇」選者